

# 長畝ふるさと通信



【2026年1月号】

## ■ 令和7年、色々ありました・・・

令和7年、色々ありました。令和の米騒動は新米が出回れば落ち着くと思いきや、絶対的なコメ不足から価格は高騰し続け、5キロ 5,000 円も珍しくなりました。4月に農水大臣が辞任し、新しく就任した人気者大臣は「市場をジャブジャブにする」と公言し、政府備蓄米をこれでもかと放出。古古古米(令和3年産米)まで出回って店頭価格 2,000 円に長蛇の列ができました。また、輸入米8割のブレンド米まで出回って、「もうボク達を作るブランド米なんて消費者ニーズに合わないのか・・・」と落胆しました。結局、備蓄米は一時的にもてはやされましたが、悪食味のためか消費は伸びず過剰在庫となり、政府の安易な政策が非難されることとなりました。当時の首相は「5キロ 3,000 円台でなければと、増産にかじを切る」政策転換を図ろうとしましたが、党首交代を機にこれまでの「需要に応じた生産が原則」との方針に180度転換されました。私たち生産者はその都度変わる政策方針に翻弄され、結局はどうなるのかよくわからないといった不安だけが残る結末となりました。



JAと民間業者とのコメ集荷競争は激化し、JAが提示する仮渡金は追加払いも出て、今年1月末にはトキ認証コシヒカリ1俵 33,500 円(令和7年は 21,000 円)となり販売高は爆上がりしましたが、その影響で末端小売価格は依然として高止まりしており、消費者のコメ離れは益々加速しています。令和7年産米の流通在庫は過剰となり、いつかはバブルが弾けて価格が暴落す

るといった憶測もデマではなさそうです。

令和8年産米の生産調整による作付け率(主食用米をつくっても良い面積率)は77.86%と前年より8.6%増えました。農林省が示してきたコメの消費量予測はデタラメだったと認めたくえでの今年の消費予測をそのまま鵜呑みするわけにはいきませんが、従来型の生産調整に従わざるを得ない百姓の弱さ・・・「思いっきり作っても売れなければ意味ないし・・・」。生産者も消費者も納得できる価格帯なんてあり得ないと思っていますが、毎日食べる主食として何よりも安定することが大事ではないでしょうか。

## ■ 新しい事業にも取り組みました

冬の農閑期にも収入が必要だと考え、佐渡ではコメに次ぐ生産量を誇る「おけさ柿」の加工事業を立ち上げました。あんぼ柿は干し柿とは違う半生タイプでゼリーのようなトロツとした触感と濃厚な甘みが特徴です。原料柿は市場出荷できず廃棄しているものなので、生産者からもお小遣い程度になると喜ばれています。稲刈り終了と同時に作業を開始し、12月の25日まで約19,000パックを製造・出荷しました。あまりなじみはないかもしれませんが、新潟市場経由で主に北海道と関東方面へ出荷していますので、お目に留まったらぜひご賞味ください。



## ■ 衆議院選挙で

「私を選ぶか〇〇を選ぶか、どっち？」みたいな解散理由でまた国政選挙です。一度の選挙で850億円もかかるそうですが、ここ数年毎年のように選挙、選挙。政権争いでこれまで敵対していた政党がくっついたり、また新しい政党ができてみたり、どの党も食品の消費税減税を打ち出してみたり・・・何がしたいのか・・・。あれほど混乱したコメ問題はどこ行った？

佐渡市がまとめた将来の地域計画では10年後、販売農家数は現在の約6割、水稻出荷契約面積は4,000ha(現在は5,000haあまり)以下になると見込まれています。農業経営意向調査では農業者の約半数が「10年後も現状維持」と回答していますが、「後継者がいない、あるいは決まっていない」が80%を占めており、決して明るい見通しではありません。これは佐渡に限ったことではなく全国的な傾向だと思うのですが、国会議員様はどう感じておられるのでしょうか。



昨年10月末に体調を崩し、年末まで2か月の間入院生活をしておりました。「健康が一番の幸せだ」と痛感させられました。みなさんも元気でおコメをたらふく食べましょう。

**おかわりは自由です。**